

配属先のスタッフ。  
ペースはゆっくりでも、  
ボランティアの存在をい  
つも大切に想ってくれる  
素敵な同僚です。



## 協力隊としての葛藤

青年海外協力隊 2018 年度 1 次隊 派遣国：トンガ王国 伊藤有未（三郷市）

トンガにいれば、私たちがよそ者。任国で感じた日本人の特徴、援助のあり方、協力隊員なら一度は直面するであろう 2 項目について考えてみました。

1 つ目は、時間的感覚の違いです。日本的感覚で言えば、「時間厳守は相手への敬意でもあり、時間を読んで行動することが美德」と幼い頃から教育されてきました。常にオンタイムの交通機関、数分の遅延で流れる謝罪アナウン

ス。分刻みで組まれるスケジュールもそれとなくこなしてきた生活環境から一転、トンガでは多少の遅れなんて大丈夫の世界。そんな中で仕事をすれば、日本人だけで行えば 1 週間で終わるものがトンガでは半年。何事も成果主義の中で育った日本人、当然の如く聞かれる「ど



この道を通りながら、  
いろんなことを考えます。

んな成果を残したの」との質問に、追い打ちをかけるように刻々と迫る限られた活動期間。応援してくださっている日本の皆様からの期待は、私たちの活力となりますが、時折、それがプレッシャーとなることも。日本とは異なる任国事情をご理解いただき、そんな生活環境の下、微力、非力ながら日々奮闘する私たち隊員を優しく見守っていただけたら幸いです。

2つ目は、協力隊として途上国に身を置いている私ですが、「先進国の開発援助は、途上国の人たちを救えるのか、発展を目指すべきなのか。」「先進国の援助に期待し、甘えているのではないか」と思うことがあります。「魚を与えるのではなく釣り方を教えよ」に倣えば、「雇用増加、技術移転、最終的に自力で機能・運用」この3要素を満たすことが援助計画の根底にあるべきものと感じています。協力隊の場合、これらの全要素をクリアすることは難しい要請内容もあります。物資供給等カタチ立ってすぐに目に見えない人的援助であることから、同僚たちからの期待度が下がるのを感じ、ボランティアとしての存在意義を自問自答することもありました。でも、くよくよしても仕方ありません。葛藤を繰り返すことも成長に繋がると信じ、残りの任期を全うします。



前の写真ですが、JICA トンガ支所の調整員およびナショナルスタッフが任地エウアに来てくださった時の1枚。ボランティアは多くの方々に支えられています。